

「初夏のキノコ(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「キノコ」には正式な定義はない。あえて定義すれば「菌類の子実体の中で、目に見える大きさのもの」ということになる。「子実体(しじつたい)」とは、胞子を作って、拡散させる為の器官と言える。つまり顕花植物で言えば、花や果実に相当する部分だ。キノコ(子実体)で作られた胞子は、通常「傘からの自然落下」や「風」によって拡散する。しかし種類によっては、奇想天外な方法をとる。



写真は「ササクレヒトヨタケ」 *Coprinus comatus* というキノコで、初夏の雑木林によく見られる。このキノコは、胞子を飛ばさない。最初はキノコ全体が真っ白だが、胞子が熟して黒くなると、子実体全体が自己溶解して、その後の雨で流される。梅雨の雨を利用した胞子拡散である。一晩で溶けてなくなるので「一夜茸」と名付けられた。溶ける前の子実体は食用になるが、アルコールとの相性が非常に悪いので、酒のつまみにしてはいけない。

他にも、カタバミの種子のように、胞子の入った袋をはじき飛ばす「タマハジキタケ」、湿度の変化で外皮が中心部を押して胞子を押し出す「ツチグリ」、キノコ全体が胞子の塊に化けて、ボロボロになる「ノウタケ」や「オニフスベ」などがある。一生地中で生活する「ツチダンゴ」というキノコもある。胞子の拡散方法だけを見ても、実に多様性に富んでいる。



「キノコ」の語源は「木の子」であろう。ほぼすべての種が土か枯れた木材から発生する。写真は「ニガクリタケ(苦栗茸)」 *Hypholoma fasciculare* という木材腐朽菌の一種だ。かわいらしいキノコだが、猛毒で中毒例が絶えない。



これは「ケショウハツ」 *Russula violeipes* というかわいらしいキノコ。「ハツ」とは「ハツタケ(初茸)」のハツで、キノコシーズンの最初の頃に見られるという意味である。不思議なことに、カブトムシのような独特な匂いを持っている。



こちらもハツタケの一種の「クサハツ」「臭初」の意味で、不快臭を持つため、食用にならない。